

## 1 「浄土論註」の豊平班担当箇所と分担

- ・ 国土莊嚴の「清浄功德から兩功德」まで  
(『真宗聖教全書』P285 の 5 行目から P292 の終わりまで)
- ・ 豊平班の参加メンバー  
森昭義、河野繁典、新宅昌紀、佐々木忠義、栗栖哲義  
オブザーバー参加 濱中紅枝、菊池詔二
- ・ 分担箇所
  - ① 新宅昌紀——「清浄功德」「量功德」
  - ② 森昭義——「性功德」
  - ③ 河野繁典——「形相功德」「種々事功德」
  - ④ 佐々木忠義——「妙色功德」「触功德」
  - ⑤ 栗栖哲義——「三種功德」「兩功德」

## 2 『浄土論』と『浄土論註』の関係等

### (1) 『浄土論』

1 卷。世親(天親)の造。菩提留支の訳。詳しくは「無量寿経優婆提舍願生偈」といい、無量寿経論、往生論などともいう。七祖聖教の一。24 行 96 句の偈頌(願生偈)と、偈頌を敷衍した長行(ごう)からなる。安楽世界を觀じ、阿弥陀仏を見ることによってその浄土に生まれたいと願うもので、偈の最初に「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安楽国」と述べ、偈の終には「我作論説偈 願見弥陀仏 普共諸衆生 往生安楽国」と結ぶ。

長行には、礼拝・讚歎・作願・觀察・廻向の五念門を修して安楽国に生れ、近・大会衆・宅・屋・園林遊戯地の五果門を得ることを説き、觀察門には觀察の対象としての浄土について三嚴二十九種の莊嚴を示す。

曇鸞がこの論を註釈して往生論註2巻を著わしたことにより、中国における善導流の浄土教を発展させる源流となり、日本では法然が浄土の正依の三経一論として尊重し、親鸞は論註にもとづいて他力廻向の説を明らかにした。

(真宗新辞典—法蔵館)

## (2) 『浄土論註』

2 卷。北魏の曇鸞の著。詳しくは「無量寿経優婆提舍願生偈註」という。無量寿経論註、往生論註、論註、註論とも称する。七祖聖教の一。世親の浄土論の註釈。

巻上は論の偈頌を解釈する総説分で、最初に竜樹の十住毘婆沙論易行品の難易二道を挙げて『浄土論』は大乗の極致であるとし、最後に八番の問答を立てて十悪五逆の罪人も十念によって往生できると説く。

巻下は論の長行を解釈する解義分で、願偈大意・起観生信・観察体相・浄入願心・善巧摂化・障菩提門・順菩提門・名義摂対・願事成就・利行満足の 10 章からなり、起観生信章には三不三信・称名破満・往還廻向、観察体相章には生即無生、浄入願心章には広略相入・二種法身、利行満足章には覈求其本(かくぐごほん)他利利他の深義・三願的証など、親鸞の教義に大きな影響を与えた問題が論じられている。西本願寺に建長 8 年(1256)の親鸞自筆加点本がある。

(真宗新辞典—法蔵館)

## (3) 二十九種莊嚴

世親の『浄土論』に説く浄土のうるわしい相。国土・仏・菩薩の三種莊嚴に大別され、三嚴二十九種ともいう。

「国土の莊嚴」に清浄功德、量功德、性功德、形相功德、種種事功德、妙色功德、触功德、三種(水・地・虚空)功德、雨功德、光明功德、妙声功德、主功德、眷属功德、受用功德、無諸難功德、大義門功德、一切所求満足功德の 17 種、

「仏の莊嚴」に座功德、身業功德、口業功德、心業功德、大衆功德、上首功德、主功德、不虛作住持功德の 8 種、

「菩薩の莊嚴」に不動遍至功德、時遍至功德、無余供養功德、遍示三宝功德の 4 種がある。

依報の国土莊嚴を器世間清浄、正報の仏・菩薩莊嚴を衆生世間清浄といい、二種清浄という。浄土三部経に根拠を求め、撰大乘論釈により類別したといわれる。曇鸞の論註には、二十九種莊嚴の意義について、大悲の願心から起り、仏威神力の現れとして、観察門の意味を願力仏力の観知信知に求めている。(真宗新辞典—法蔵館)

### 3 宮城顛先生の解説から(『宮城顛選集』第16巻より)

#### (1) 国土莊嚴について

- ・ 莊嚴十七種の中の**第一清淨功德が総**、清淨というところに浄土の功德の全体がいつくされる。**第二量功德から第十七の一切所求満足までは別**である。別というのは、仏教ではいつも総、別という形で説明してありますが、この場合は具体例というようにお考えいただいてもよいわけです。
- ・ **清淨功德という、その内容を具体的に一つ一つおさえていけば、第二以下第十七までのそういう具体的なかたちでみていかれるという意味を持つ**かと思います。
- ・ その中に**第二量功德から第九雨功德までが約依報(所依)**、それから**第十光明功德から第十七の一切所求満足功德までが約正報(能依)**と、大きく二つに分けてあるわけです。」
- ・ 「**約依報とは有情がその身の依り所とする環境、すなわち国土を表しますし、約正報のほうはその環境に依って生きていく人々、住人のほうを意味します。ただ、いまはその全体が器世間ですから、つまり、器世間の中の約依報、約正報ですから、自然環境と社会環境**というように考えてよいかと思います。」(p159)
- ・ 「この二つで浄土という器世間莊嚴、つまり**国土性、国土を表す**わけです。国土の自然を通して国土を表し、国土の人々を通して国土を表す。そういう自然環境と社会環境の二つをもって表します。
- ・ いまはその自然環境のほうですが、**自然環境のほうに『体性』と『相貌』と『受用』**三つを見られているわけです。
- ・ **量功德と性功德が体性を表します。その浄土の本質、本性、本質的な功德とはなにかという**ことです。
- ・ **形相功德以下、種々事、妙色の三功德莊嚴は、浄土はいったいどういう『すがた・かたち』相貌をしているか**ということを表し
- ・ **触功德以下三種、雨の三功德莊嚴は、浄土の受用を表す**とあります。受用というのは、生活という意味です。状況を受けて、それを用いるのですから、**受用というのは生活を表す。そこではどういう生活が営まれるか**ということです。
- ・ そのように、浄土の『約依報』、自然環境が、体性、相貌、受用の三つでみられているわけです。」(p160)

## 4 その他参考

### (1) 2022.9 の教師会研修会資料から

#### ・ 天親菩薩と曇鸞大師のお仕事の重要なこと

##### (1) 阿弥陀仏を無碍光仏と表してくださったこと

○阿弥陀信仰が偶像信仰や自然礼讃的な信仰ではなく、本当の意味で、人間の苦惱が意味を持つようなかたちで応えていくような仏教として明らかにされた。

##### (2) 浄土を二十九種莊嚴として明らかにしてくださったこと

○死後往生という考え方の歯止めとなった。

○浄土は二十九種莊嚴として、念仏者のところに開かれていく世界であり、生活であるということを私たちに示した。

#### ・ 二十九種莊嚴

○第一 清浄功德 ……浄土の総相

○第二 量功德 ……浄土を代表する莊嚴——果としての根本の相

○第三 性功德 ……浄土を成り立たせる因(法蔵菩薩の慈悲の世界) } <体>

○第四 形相功德(「自体満足」)

○第五 種々事功德(「具足」) } 相貌中の相貌<相>

○第六 妙色功德(「無比」)

○第七 触功德(「三事和合」)

○第八 三種功德 } 受用功德<用>

○第九 雨功德

### (2) 豊平班の担当箇所的重要性

・ 今回豊平班(東京班も同じ)の担当する「第一～第九」の功德は

**「約依報＝有情がその身の依り所とする環境、すなわち国土を表します」**

・ 解り易く言えば「浄土とはどういうところか」を明確にし、「第十～第十七」の功德の

**「約正報＝その環境に依って生きていく人々、住人のほうを意味」**につないでいく。

・ 論註の中心的な重要箇所であり、大切に頂戴したい。

## 5 各自のまとめ資料

- (1) 新宅昌紀——「清浄功德」「量功德」……資料 1
- (2) 森昭義——「性功德」 ……………資料 2
- (3) 河野繁典——「形相功德」「種々事功德」・資料 3
- (4) 佐々木忠義—「妙色功德」「触功德」……資料 4
- (5) 栗栖哲義——「三種功德」「雨功德」……資料 5

【清浄功德】

1、偈文

観彼世界相 勝過三界道

彼の世界の相を観するに 三界の道に勝過せり

2、觀察門の概説

これより以下は、これ第四の觀察門なり。この門のなかを分かちて二の別となす。

一には器世間莊嚴成就を觀察す。

二には衆生世間莊嚴成就を觀察す。

これより以下は五念門の中の第四の觀察門である。五念門とは、天親菩薩における見仏の行である。

第一に礼拝門、第二に讚嘆門、第三に作願門、第四に觀察門、第五に回向門である。この觀察門の中を分けて、二つに区別する。

一には、器世間の莊嚴の成就を觀察する。

二つには、衆生世間の莊嚴の成就を觀察する。

3、觀察器世間莊嚴成就について

(1)範囲

この句より以下「願生彼阿弥陀仏国」に至るまでは、これ器世間莊嚴成就を観するなり。

この句「観彼世界相」より以下「是故願生彼阿弥陀仏国」「聖全二九八の八行目」というまでは、器世間の莊嚴の成就を觀察するところである。

(2)内容

器世間を観する中に、復、分かちて十七の別となす。文に至りてまきに目(なじ)くべし。

その器世間を観する中に、また十七に区別する。その名目は、一つ一つの文に至って、

- 一には莊嚴清浄功德成就、二には莊嚴量功德成就、三には莊嚴性功德成就、四には莊嚴形相功德成就、
- 五には莊嚴種種事功德成就、六には莊嚴妙色功德成就、七には莊嚴觸功德成就、八には莊嚴三種功德成就(水・地・虚空)、九には莊嚴雨功德成就、十には莊嚴光明功德成就、十一には莊嚴功德成就、十二には莊嚴功德成就、十三には莊嚴功德成就、十四には莊嚴功德成就、十五には莊嚴功德成就、十六には莊嚴功德成就、十七には莊嚴功德成就とつける。

4、偈文の大意

(1)第一事

この二句はすなはちこれ第一の事なり。

この二句「観彼世界相 勝過三界道」は、即ち阿弥陀仏の浄土が如何なる世界であるかを示す第一の事がらである。

## (2)名目

名づけて観察莊嚴清淨功德成就となす。

名づけて観察莊嚴清淨功德成就とする。

## (3)総相

この清淨はこれ総相なり。

この清淨功德は、十七種の莊嚴を総まとめにした相（すがた）であり、後の十六種は清淨功德の個別の相である。

## 5、観察莊嚴清淨功德成就について

(1)莊嚴清淨功德について 所以と欲得

仏本この莊嚴清淨功德を起したまへる所以は、三界を見そなはずに、これ虚偽の相、これ輪転の相、これ無窮の相にして、虱蠖(しゃっかく)「屈(か)がり伸びる虫なり」の循環するがごとく、蚕繭(さんけん)さんけん「蚕衣(さんえ)なり」の自縛するがごとし。あはれなるかな衆生、この三界に締(しば)「結びて解けず」られて、顛倒・不淨なり。衆生を不虚偽の処、不輪転の処、不無窮の処に置きて、畢竟安樂の大清淨処を得しめんと欲しめす。

このゆゑにこの清淨莊嚴功德を起したまへり。

仏がもと、この莊嚴清淨功德を起されたわけは、欲界・色界・無色界の三界は、虚偽にみち、流転し、輪廻は窮まることのないことをお見抜きになられたからであった。その相はあたかも、尺とり虫がめぐり歩くようであり、また蚕がまゆをつくって自らを縛っているようであると教えられる。ああ何と哀れなことであろうか、衆生はこの三界の顛倒の不淨に束縛されている。その相を見られ、衆生を虚偽なき処、流転なき処、無窮でない処に安住させ、絶対安樂の大清淨の処を得させようと願われたのである。だからこの清淨莊嚴功德を起されたのである。

## (2)成就について

「成就」とは、いふことは、この清淨は破壊(はえ)すべからず、汚染(わけん)すべからず。三界の、これ汚染の相、これ破壊の相なるがごときにはあらず。

「成就」とは、この清淨は破壊できず、けがれによって染めることができない。三界のようにけがれに染まり、破壊されている相とはまったくちがう、ということであらわしている。

## 6、偈文の詳説

「観」とは観察なり。

「観」とは観察である。

「彼」とはかの安楽国なり。

「彼」とは彼の安楽国である。

「世界相」とはかの安楽世界の清浄の相なり。その相、別に下にあり。

「世界相」とは彼の安楽世界の清浄の相である。その相については個別に下にのべられている。

「勝過三界道」の「道」とは通なり。かくのごとき因をもつて、かくのごとき果を得。かくのごとき果をもつて、かくのごとき因に酬(むく)ゆ。因に通じて果に至る。果に通じて因に酬ゆ。ゆゑに名づけて道となす。

「勝過三界道」の「道」とは通の意味である。これこれの原因によってこれこれの結果を得、これこれの結果によってこれこれの原因に酬いるというように、原因を通して結果に至り、結果を通して原因に酬いるから「道」と名づけるのである。

「三界」とは、一にはこれ欲界、いはゆる六欲天・四天下の人・畜生・餓鬼・地獄等これなり。二にはこれ色界、いはゆる初禪・二禪・三禪・四禪の天等これなり。三にはこれ無色界、いはゆる空処・識処・無所有処・非想非非想処の天等これなり。

「三界」とは、一に欲界である。いわゆる六欲天・四天下の人・畜生・餓鬼・地獄などがこれである。二には色界である。いわゆる初禪・二禪・三禪・四禪などがこれである。三には無色界である。いわゆる空処・識処・無所有処・非想非非想処の天などがこれである。

この三界はけだしこれ生死の凡夫の流転の閻宅なり。復苦楽小しき殊(こと)なり、修短しばらく異なりといへども、統べてこれを觀するに有漏にあらざるはなし。倚伏あひ乘じ、循環無際なり。雜生触受し、四倒長く拘はる。かつは因、かつは果、虚偽あひ襲ふ。

この三界は、およそ生死の凡夫の流転きわまりない閻のすみかであつて、受けている苦楽は多少の異なりがあり、寿命に長い短いの差がわずかりあるとはいへ、すべてこれを觀るに、煩惱のけがれないものはない。禍いと福とはあい寄りよられ、互いに重なり、いつはてるともなくめぐり、有漏の雜業によって起こる善悪さまざまの生を受けて、常樂我淨の四顛倒に長く拘束されている。因も果も虚偽のすがたをくりかえしているのである。

安樂はこれ菩薩(法藏)の慈悲・正觀の由生、如来(阿弥陀仏)の神力本願の所建なり。胎・卵・湿の生、これによりて高く揖(おさ)め、業繫の長き維(つな)、これより永く断つ。統括の権、勸めを待たずして己を彎(ひ)く。勞謙善讓、普賢に齊しくして徳を同じくす。

安樂淨土は、菩薩の慈悲と正觀の智慧より生じ、如来の不思議な力と本願によって建てられた世界である。胎生・卵生・湿生など流転の生は、これによってはるかに去り、業の緊縛の長い綱はこれによって永久に断たれるのである。衆生を救おうとする統括の方便は、諸仏の勸めをまたずに発され、勞を自分の功績にせず、善く人に譲ることは、普賢菩薩とならんでその徳を同じくするのである。



「勝過三界」とは、そもそもこれ近言(じんごん)なり。

「三界に勝過して」とは、これはわれわれの手近にいわれたことばなのである。

### 解説

○ここからは、五念門の中の観察門です。

○観察門は器世間莊嚴功德と衆生世間莊嚴功德を観察するものです。

観察の行は、印度では毘婆舍那(ヴィパシュヤナー)の行のことで、先の作願、奢摩他(シャマタ)と合わせて、唯識派では瑜伽行に相当するものであり、いわゆる止観の行のことです。奢摩他は心を一境に集中させて寂靜三昧に入ること、その寂靜たる状態において対象を正しく観察することを毘婆舍那といいます。

『論註』での観察門、器世間莊嚴では、阿弥陀仏の国土を観察したてまつらんとすれば、逆に仏が私たちを見そなわして、哀れむべき私たちの世間の在り方をお知らせくださっております。

○三界は、六道の世界であつて、欲界・色界・無色界に分けられる。下は地獄界から上は天界まで、非常に広大な尺度をもつて説かれるが、これは言わば、私たちの迷いが、まことに広く深いことを教えてくださつてあるのだと思います。

○天親菩薩、曇鸞大師は、浄土は二十九種莊嚴として、念仏者のところに開かれていく世界であり、生活であるということをお示しくくださった。目標としての浄土ではなく、浄土に向かつて生きていかんとする者の道しるべというべきか。

○具体的な教え。智慧ましまして知らされるところに、お礼申さねばならない。

・閻宅。真実に暗い世界が自宅(すみか)である。教えを聞くべき場である。

・倚伏相乗。相対的、相乗的な禍福感。

・雑生触受。雑は煩惱の雑業、生はその雑業から生まれるもの、それに触れて苦楽の感情を受けるところ。智慧によつて明かされる不浄というのは、煩惱によつて振り回されている現実のことであろう。

・四顛倒。ここでは有為の四顛倒の事。無常なる世界を常住と思ひ、苦の世界を楽と執し、無我の法を我と考え、不浄の世界を清浄とみていること。頭が下に、足を上にして、逆さになって墮ち続けている様。

○『論註』下巻に至つた折には、「入一法句」「不断煩惱得涅槃分」のところと合わせて、改めて頂いてみたい。

○「畢竟安樂の大清浄処を得しめんと欲しめす」とは、どういうことか？

### 【量功德】

#### 1、偈文

究竟如虚空 广大无边際

究竟して虚空の如く 广大にして辺際無し

## 2、名目

この二句は莊嚴量功德成就と名づく。

この二句は莊嚴量功德成就と名づける。

## 3、所以と興願

仏本この莊嚴量功德を起したまへる所以は、三界を見そなはずに陝小にして墮(き)「敗城の阜(おか)なり」墜(けい)「山の絶坎(ぜつかん)なり」陪(はい)「土を重ぬるなり。一にはいはく備なり」階(じょ)「渚(じょ)のごときもの、階丘(しよきゅう)なり」なり。あるいは宮觀迫迕(くかんはくさく)し、あるいは土田逼隘(どんでんひつあい)「陋(ろう)なり」す。あるいは志求するに路促(みちつづ)まり、あるいは山河(せんが)隔「塞なり」ち障ふ。あるいは国界分部せり。かくのごとき等の種々の拏急の事あり。仏がもと、この莊嚴量功德を起こされたわけは、三界を見られるに、狭く小さく、土地のくぼんだところや裂けたようなところがあるかと思えば、小高いところや水面に土が盛り上がったところがある。あるいは宮殿の高殿は迫(せま)く窮屈であり、土地田畠はせばまってせまくるしい。どこかへ行こうとしても路(みち)はせまく、山や河が行く手をはばみさえぎり、国境に隔てられて行くことができない。このようにさまざまのせわしさで息苦しく、うろたえるようなことがある。

このゆゑに菩薩、この莊嚴量功德の願を興したまへり。

「願はくはわが国土虚空のごとく広大にして無際ならん」と。

だから菩薩は、この莊嚴量功德の願いを興(おこ)され、「我が国土は虚空の如く広大で辺際(きわみ)ないように」と願われたのである。

## 4、偈文の詳説

「如虚空」とは、いふところは、来生のもの衆(おお)しいへども、なほなきのごとくならんとなり。

「如虚空」とは、この国に來生する者の数がいかに衆(おお)くても、なお一人もいないように感じられるほどだという意味である。

「廣大無辺際」とは、上の「如虚空」の義を成す。

なんがゆゑぞ「如虚空」といふ。広大にして無際なるをもつてのゆゑなり。

「廣大無辺際」とは、上の「如虚空」という意味を全うするものである。つまり、どうして虚空のようかといえば、広大で際限がないからである。

## 5、量功德の成就

「成就」とは、いふところは、十方衆生の往生するもの、もしはすでに生じ、もしはいまに生じ、もしはまさに生ぜん。無量無辺なりといへども畢竟じてつねに虚空のごとく、廣大にして無際にして、つひに満つ時なからん。このゆゑに「究竟如虚空 廣大無辺際」といへり。

「成就」とは、十方衆生の中の往生する者一すでに往生したもの、今往生するもの、これから往生するもの一は量りなく、はてしなくあつても、つづまるところ常に虚空のように廣大で際限なく、終(ついに)に満ちてしまうときがないということである。

だから「究竟如虚空 廣大無辺際」といわれているのである。

## 6、問答

問ひていはく、維摩のごときは、方丈に苞容して余りあり。なんぞかならず国界無貲(むし)なるをすなはち廣大と称する。

問う。維摩居士などは、小さな部屋に、高さ八万四千由旬の獅子座を三万二千つつみ入れて、なお余りがあつたという。どうして国の界(さかい)のはかりないところにかぎって廣大と称するのか。

答へていはく、いふところの廣大は、かならずしも畦(けい)「五十畝(せ)なり」畹(えん)「三十畝なり」をもつて喩へとなすにあらず。ただ空のごとしといふ。又なんぞ方丈を累(わすら)はさんや。

答う。ここにいう廣大は、必ずしも五十畝を畦(けい)といい、三十畝を畹(えん)というような場所の広さを譬えにしているのではない。ただ空のようだというのである。そのうえにどうして部屋の広さなどのたとえにかかずらう必要があるうか。

また方丈の苞容するところは陝にありて広なり。覈(まこと)「実なり」に果報を論ずるに、あに広にありて広なるにしかんや。

また維摩の部屋がつつみいれるのは、狭いところにあつて広いのである。厳密に結果の優劣を論ずれば、どうして広いところにあつて広いというのに及ぼうか。

### 感想等

○量功德と性功德。器世間莊嚴第一の清淨功德は総相で、第二の量功德からは個別の相を表されてある。量功德は浄土を代表する莊嚴(果)であり、性功德は浄土を成り立たせる因(法蔵菩薩の慈悲の世界)である。体相用で言えば、この二莊嚴功德は体(本質、本性)である。

○量功德には、浄土の広さは廣大無辺であると讃えられてあります。ここで思われることは、まこと廣大なりと説かれる浄土に対して、自身が思う救いの世界というのは、実に狭いものであるということです。仏心に頭が下がらないからでしょう。罪福心によって自他を裁き、貪瞋損得の心によって人づきあいをして、都合のよいように弥陀の浄土を計らつておることです。まことに恥ずべきこと、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀・・・・。

2024年（令和6年5月） 森 昭義

聖典に親しむ会曇鸞 『往生論註』巻上 総説

## 分 観察門 器世間 性功德

### （論註） 正道の大慈悲、出世の善根より生ず。

この二句は性厳性功德成就と名づく。佛本何が故ぞ此の莊嚴を起したまへる。有る国土を見なはずに、愛欲を以ての故に則ち欲界在り。攀厭禪定を以ての故に則ち色・無色界有り。此の三界は皆是有漏なり。邪道の所生なり。長く大夢に寝て出でんむと怖ふを知るに莫し。是の故に大悲心を興したまへり。願はくは我成佛せむのに、無上の正見道を以て清浄の土を起して三界を出さんと。性は是れ本の義なり。言うところは、此の浄土は法性に随順して法本に乖かず。事、花嚴経の宝王如来の性起の義に同じ。又言うところは積習して性を成ず。法蔵菩薩諸波羅蜜を集めて積習して成る所を指す。亦性と云ふは是聖種性なり。序め法蔵菩薩、世自在王佛の所に於て、無生法忍を悟りたまへり。爾の時の位を聖種性と名づく。是の性の中に於いて四十八の大願を發して此の土を修起せり。即ち安樂浄土と日ふ。是彼の因の所得なり。果の中に因を説く。故に名づけて性と為す。又言ふところは、性は是必然の義なり不改の義なり。海の性の一味にして、衆流入は必ず一味と為りて海の味はいひ、彼に随ひて改まざるがごとし。又人の身の性は不浄なるが故に、種種の妙好の色香美味、身に入れば皆不浄と為るがごとし。安樂浄土は諸の往生する者、不浄の心無し。畢竟じて皆清浄平等無為法身を得ることは、安樂国土清浄せるを以ての故なり。正道の大慈悲、出世の善根より生とは、平等の大道なり。平等の道と為す所以は、平等の道を名づけて正道と為す所以は、平等は是諸法平等の体相なり。諸法平等なるを以ての故に発心等し。発心等し。発心等しきガ故に道等し。道等しきが故大慈悲等し。大慈悲等し。大慈悲は是佛道の正しい因なるが故に正因なるが故に正道の大慈悲と言えり。慈悲に三縁有り。一つは衆生縁、是小悲

なり。二には法縁、是中悲なり。三には無縁、是大悲なり。大悲は即ち出世の善なり。安樂浄土は此の大悲より生ぜるガ故なり。故に此の大悲を謂ひて浄土の根為す。故に出世善根生と日へり

### （解読）

此の二句は、莊嚴世性功德成就と名づける

佛はもと、どうしてこの莊嚴を起したもうたかといえ、ある国土を見られるに、愛欲によつての故に欲界があり、禪定を修して高上りようとして欲界を厭うことによつて色界・無色界がある。この三界はすべて煩惱にとらはれており、邪な道によつて生じたものである。人々は大きな迷いの夢の中にぐつすりと寝こんでいて、三界を出る道があるうなどは知ることもないのである。

だから佛は大悲の心を興したもうて、私が佛と成るには、この上ない正見の道をもつて、清浄な国土を起こし、人々をこの三界から出させようと願われたのである。

性とは本という意味である。つまり、この浄土は法性にしたがひ、法の根本(不生の理)にそむかないものである。このことは、『華嚴経』の宝王如来性起の意義と同じである。

また、性は行為を積み重ね、くりかえして性を成るのである。これは法蔵菩薩を指している。法蔵菩薩は、諸々の波羅蜜を集め、それを積み重ねくりかえして、この浄土を成じたもうたのである。

また、性と。は聖種性のことであるはじめ法蔵菩薩は世自在王佛のみもとにあつて、無性法忍を悟られたが、この時の位を聖種性となづけける。法蔵菩薩は、この性の位のうちにあつて、四十八の大願を發し、この土を修起せられた。即ちこれを安樂浄土というのである。この浄土は、この性種性における発願によつて得られた結果の中に、その原因を説くから、性と名づけるのである。

また人の身の性とは必然の意味であり、不改の意味である。また人の身である。たとえば、

海の性は一味であつて、いろいろな流れが入つてきても、必ず一味となり、海の味はそれらによつて改わることはないようなものである。また人の身の性は不浄であるから、いろいろの素晴らしい色や香り、美味しいものでも、身体にはいればすべて不浄となるようなものである。安樂浄土は諸々の往生する者に、不浄の心もない。つまりとるところすべて清浄で平等な無為発身を得るのである。

「正道の大慈悲、出世の善根より生ず」とは平等の大道である。もとより平等の道であるからこういふのである。名づけて正道とするわけは、平等とは、諸法の根本の相であつて、諸法が平等であるから、法蔵菩薩の発せられた願心が平等であるから、修行の道は平等である。大慈悲こそは佛道の正因である。(だから平等の道を正道といふのである)

さらに正道の大慈悲といふのは、慈悲にはそれをおこすのに三種の縁がある。

一には、衆生を縁としておこす慈悲、これは小悲である。

二には、法を縁としておこす慈悲、これは中悲である。

三には、縁なくしておこす慈悲、これが大悲である。

大悲は即ち世を越えた出た善である。安樂浄土はこの大悲より生ずるが故に、この大悲をもつて浄土の根本とするのである。

だから「出世の善根より生ずる」といふのである。

### ●私の感相 国土莊嚴十七種

『往生論註』総説分 觀察門 器世間 性功德  
今生きているこの世界を三界であるといふようなことも考えたこともないような生き方をしていたことをしられます。大夢、大きな迷いの中にくつすりと寝こんで、大きな世界があるうとは思つたこともない当たり前の普通世間の生き方が、火宅無常の世界だとはおもつてもいなかった、親鸞聖人は23—13に曰く

煩惱具足の凡夫・火宅無常の世界は万の事み

なもてそらごと・たわごと・真実あること無きに、ただ念佛のみぞまことに在します。

だから仏は大悲の心興したもうて、私が仏と成るには此の上ない正見の道をもつて、清浄な国土を起こし、人々を三界から出させようと願われたのである。

法蔵菩薩は世自在王仏のみもとあつて、無性法忍を悟られたが、此の時の位を聖種性となづる。法蔵菩薩は、この性の位のうちにあつて、48願の大願を起こし、この土修起せられた。これを安樂浄土といふのである。

●人の身の性とは必然の意味であり不改の意味である。また人の身だといはれる。

たとえば海の性は一味であつて、いろいろの流れ入つてきても、必ず一味となり改まることがないようなものである。

「正道の大慈悲、出世の善根より生ず」とは平等の大道である。

さらに正道の大慈悲とは、それをおこすのに、それをおこすのに三種の縁がある。

一には、衆上を縁としておこす慈悲、小悲、

二には、法を縁としておこす慈悲、これは中悲、

●三には、縁なくしておこす慈悲、これが大慈悲

これが大慈悲である。大悲は即ち世を越えた出た善である。安樂浄土はこの大悲より生ずるが故に、この大悲をもつて浄土の根本とするのである。だから「出世の善根より生ずる」といふのである。大慈悲こそ私における親さまでござました。

●現在私のいる場所を確認させて下さる教えだと拝受させて頂きました。

往生論註（上巻）総説分

（論註）

浄光明満足せること  
鏡と日月輪との如し

此の二句は莊嚴形相功德成就と名づく。

仏本此の莊嚴功德を起こしたもう所以は、日の四域に行くを見るに、光三方に周からず。庭燎宅に在るに、明らかなること十仞に満たず。

是を以ての故に浄光明を満たさんと願いを起こしたまえり。日月光輪の自躰に満足せるが如く、彼の安樂浄土は復た廣大にして辺無しと雖も、清浄の光明充塞せざること無けん。故に浄光明満足・如鏡日月輪と曰えり。

諸の珍宝の性を備えて  
妙莊嚴を具足せり

此の二句は莊嚴種種事功德成就と名づく。

仏本何が故ぞ此の莊嚴を起こ

觀察文器世間形相功德種種事功德 豊平班 河野繁典

（現代語訳）

浄光明満足せること 鏡と日月輪との如し

この二句は莊嚴形相功德成就と名づける。

仏がもと、この莊嚴功德を起こしたもうた所以は、日が四域にめぐるのを見るに、一方が光がそそぐときは、他の三方に光がとどかない。また宅内にあつて庭で大きな火をたいても、明るく照らされるには十仞にも満たない。

このようなわけだから、清浄な光明を満足しようとの願いを起こしたもうたのである。日や月の光が、それ自躰において満足しているように、彼の安樂浄土は、廣大で辺がないとはいへ、清浄の光明が充滿していたらぬところとてない。

だから「浄光明満足せること、鏡と日月輪との如し」というのである。

○ 形相功德 形は自体の意。相は認識の対象たる相。浄土の万物は、それは自体光明を満足していることを明かすのが形相功德である。

○ 四域 須弥山を中心とする世界の中、外海に位する四大洲のこと。ここは日や月の届く限界の地である。日や月は須弥山を中心として東より西に回るから北洲が夜半の場合は、東洲は日没、南洲は日中、西洲は日の出前というように、一方に日光が当たるときは、三方に光がそそがない。

○ 庭燎 庭内でたくかがり火。

○ 十仞 長さの単位。一仞は八尺。一説には七尺又は四尺ともいう。

諸の珍宝の性を備えて 妙莊嚴を具足せり

この二句は莊嚴種種事功德成就と名づける。

仏はもと、どうしてこの莊嚴を起こしたもうたかといえ、<sup>1</sup>

したまえる。有る国土を見そ  
なわずに、涅土を以て宮の飭しよく  
と為す。  
木石を以て華觀と為す。或は  
金を彫り玉を鏤ちりばむ、意願充ず。  
或は宮百千を備うれば、具に  
辛苦を受く。  
此れを以ての故に大悲心を興  
したもう。願わくは我れ成仏  
せんに、必ず珍宝具足し、嚴麗  
にして自然に余有ることを相  
い忘れ、自ら仏道を得しめた  
まえり。

この莊嚴の事、縱使毗首羯磨たといびしゅかつま  
が工妙絶と称すとも、思い  
たくみよぜつ  
を積み想いを竭つくすとも、豈に  
能く取りて凶うつさんや。

性とは本の義なり。能生既に  
淨し、所生焉いずくんぞ不淨を得ん。  
故に經に言わく、其の心淨き  
に随つて則ち仏土淨し、と。  
是の故に備諸珍宝性・具足妙  
莊嚴と言えり。

ある国土を見られるに、泥や土で宮殿を飾り、木や石で華麗  
な樓閣をつくっている。あるいは金を彫り、玉をちりばめてあ  
るが、思うように願いを満たすことができない。あるいは宮々  
と努力して、あらゆるものを完備しようとすれば、さまざまの  
辛苦を受けるのである。

このようなわけだから、大悲の心を興したもうて、私が仏  
と成るには、必ず珍しい宝物を十分にそなえ、莊嚴華麗のし  
て、しかも自然に他のものに対する執着を忘れて、おのずか  
ら仏道を得しめたい、と願われたのである。  
たもう。願わくば我成仏せんに、必ず珍宝具足し、嚴麗にし  
て自然に余り有ることを相い忘れ、自ら仏道を得しめたま  
えり。

この莊嚴のさまは、たとい毘首羯磨が細工に絶妙であるとい  
つても、彼がどれほど思案を積み、思いをつくしても、それ  
をまねることさえできないほどである。

性とはさききのべたように根本という意味である。浄土の  
莊嚴を生み出している根本の願心がすでに清浄である以上、  
それから生まれた莊嚴が、どうして不浄でありえようか。だ  
から經にいつている。その心が浄らかであれば、仏土は浄ら  
かである、と。だから「諸の珍宝の性を備えて 妙莊嚴を具  
足せり」といわれているのである。

- 種々事しはものから。浄土の樹や池や樓閣等のものが  
ら。
- 宮饒みやにほは飾りに同じ。
- 華觀けわくわんは華麗な寓觀（樓閣）の意
- 毘首羯磨びしゅかつま=visvakarman 種々の工作をなし、建築を司るイ  
ンドの天神。妙匠・工巧・種々工業と訳する。
- 經きやう『維摩詰所説經』のこと。この言葉は卷上の仏国品  
（大正蔵十四・五三八c）に出る。

(私の感想)

浄土の形相は清浄なる光明が充滿していて、廣大無辺の浄土ではあるが、その光明が至らぬ処が無い。また種々事とは、浄土の国土をなす宮殿や楼閣が全て珍宝をもって充足しており、常に妙なる莊嚴を具足して、自然に仏道を得しめたいと思う心がおこると言う浄土の相貌を顕していると言う事が言われているのではないかと思えます。



◎ 2024 年度「聖典に親しむ会」豊平班 佐々木忠義分担箇所 2024.4.22

無垢光炎熾 明浄曜世間

この二句は莊嚴妙色功德成就と名づく。仏本なんがゆゑぞこの莊嚴を起したまへる。ある国土を見そなはずに、優劣不同なり。不同なるをもつてのゆゑに高下もつて形る。高下すでに形るれば、是非もつて起る。是非すでに起れば、長く三有に淪〔没なり〕む。このゆゑに大悲心を興して平等の願を起したまへり。「願はくはわが国土は光炎熾盛にして第一無比ならん。人天の金色よく奪ふものあるがごとくならじ」と。いかんがあひ奪ふ。今日の時中の金を仏（釈尊）の在時の金に比するにすなはち現ぜず。仏（釈尊）の在時の金を閻浮那金に比するにすなはち現ぜず。閻浮那金を大海のなかの轉輪王の道中の金沙に比するにすなはち現ぜず。轉輪王の道中の金沙を金山に比するにすなはち現ぜず。金山を須弥山の金に比するにすなはち現ぜず。須弥山の金を三十三天の瓔珞の金に比するにすなはち現ぜず。三十三天の瓔珞の金を炎摩天の金に比するにすなはち現ぜず。炎摩天の金を兜率陀天の金に比するにすなはち現ぜず。兜率陀天の金を化自在天の金に比するにすなはち現ぜず。化自在天の金を他化自在天の金に比するにすなはち現ぜず。他化自在天の金を安樂国中の光明に比するにすなはち現ぜず。所以はいかんとすれば、かの土の金光は垢業より生ずることを絶つがゆゑなり。清浄にして成就せざるはなきゆゑなり。安樂浄土はこれ無生忍の菩薩の浄業の所起なり。阿弥陀如来法王の所領なり。阿弥陀如来を増上縁となしたまふがゆゑなり。このゆゑに「無垢光炎熾 明浄曜世間」といへり。「曜世間」とは二種世間を曜かすなり。

<意識>

- ・莊嚴妙色功德成就・浄土はすばらしい形と色彩で成就されている。
- ・ある国土を見そなはずに、優劣不同なり。不同なるをもつてのゆゑに高下もつて形る。高下すでに形るれば、是非もつて起る・・仏もと何が故にこの莊嚴を発されたかという、ある国土を観ると、その国土の中に色々なことに優劣が立っている。そのために、例えば人についても、その人の持っている財産についても色々な形で優劣がある。そのために尊いものと卑しい者が現れてくる。(形・・「現れる」と読んだ方が分かりやすい。)
- 尊いものと卑しいものが現れば、尊いものを是とし、卑しいものを非とする。
- ・是非すでに起れば、長く三有に淪〔没なり〕む・・そこに是非の争いが生まれてくる。その争いによって欲界・色界・無色界の状況が生まれ長く迷いの境涯に沈んでいく。
- ・このゆゑに大悲心を興して平等の願を起したまへり。「願はくはわが国土は光炎熾盛にして第一無比ならん。・・私の国土のすべては光り輝いて、すべてが第一無比であろう。第一無比とは、皆一番。だから比べようがない。つまり、すべての存在は他と比べることので

きない在り方をしている。それをはっきりと確認されている世界を浄土である、と。

人天の金色よく奪ふものあるがごとくならじ」と。・人間・神々のところある金色は相対的なものであって、価値的に上下を付けられるが、それとは浄土は違うのである。

・いかにあひ奪ふ。・「あひ奪う」とはそこに入ったら存在意味が失われるということ。より高い、より輝くものの前では、より低いものは、その存在価値が失われていく。これ以後、ずっと相対させながら、より高いものの前では「現ぜず」（影が薄くなる）ことを比較していく。

・所以はいかんとすれば、かの土の金光は垢業より生ずることを絶つがゆゑなり。清浄にして成就せざるはなきゆゑなり。・それはどうしてか。安楽浄土は無生忍（不生不滅の法を体得した菩薩）を得た菩薩の浄らかな業、煩惱の全く雑わらない智慧清浄の業によって莊嚴された国土であるからである。

・安楽浄土はこれ無生忍の菩薩の浄業の所起なり。阿弥陀如来法王の所領なり。阿弥陀如来を増上縁となしたまふがゆゑなり。・安楽浄土は八地以上の浄心の菩薩によって起こされた浄業によって起こされた世界であり、また真理の王である阿弥陀如来の領有されているところの世界である。だから、他化自在天のような迷いの境涯とはくらべものにならない。

・このゆゑに「無垢光炎熾 明浄曜世間」といへり。「曜世間」とは二種世間を曜かすなり。・二種世間とは器世間と衆生世間。世間とは浄土の世界のことである。器世間とは浄土の環境、衆生世間とは浄土の主の阿弥陀仏と聖衆の世界のこと。後に浄入願心章のところで、主と伴を分け三種莊嚴とされる。安楽浄土は環境も主体もすべて輝いている。これが安楽浄土の世界だという。

・安楽浄土の境涯は絶対の世界であるから、時々物々すべてが絶対である。一木一草にいたるまで絶対の尊厳さを持っている。それが安楽浄土であるということである。

#### <考察>

ここで「阿弥陀仏を増上縁とする」という言葉が出ている。この言葉は、もう一度最後に出てくる。それが論註下巻の最後の「覈求其本釈」の「覈（まこと）に其の本をたずぬれば阿弥陀仏を増上縁とする」、と。この場合の「増上縁とする」は俱舎などで語る「与力増上縁」、つまり「因に対する縁」というような内容ではなく、衆生の往生の因も果もすべてが阿弥陀仏の本願力に支えられている。このことを「阿弥陀如来を増上縁」と言っている。つまり、浄土を建立されたのは法蔵菩薩。その浄土の因も果も法蔵菩薩によって成就され、阿弥陀仏によって住持、支えられている。そのことを「増上縁とする」といったのであるから、衆生が五念門行を行じて浄土に生まれ、五功德門を完成していく。そのことのすべてが阿弥陀仏の本願力に支えられて成就していく、という文脈である。

それで親鸞聖人は「増上縁」というものを特別に、単ある「因をたすける縁」という分際ではなく「因縁業果論の因縁」としてみていかれる。その釈例がここから出てくる。（梯先生講義録から）

宝性功德草 柔軟左右旋 触者生勝樂 過迦旃隣陀

この四句は莊嚴触功德成就と名づく。仏本なんがゆゑぞこの莊嚴を起したまへる。ある国土を見そなはずに、金・玉を宝重すといへども衣服となすことを得ず。明鏡を珍翫すれども敷具によろしきことなし。これによりて目を悦ばしむれども、身に便りならず。身・眼の二情あに鋒楯せざらんや。このゆゑに願じてのたまはく、「わが国土の人天の六情、水乳に和して、つひに楚越の勞を去らしめん」と。ゆゑに七宝柔軟にして目を悦ばしめ身に便りなるなり。「迦旃隣陀」とは、天竺（印度）の柔軟草の名なり。これに触るればよく樂受を生ず。ゆゑにもつて喩へとなす。註者（曇鸞）のいはく、この間の土・石・草・木はおのおの定体あり。訳者（菩提流支）なによりてか、かの宝を目けて草となすや。まさにその（ひょう然）；[草風を得る貌なり] 然；[草の旋る貌なり]（えいびょう）；[細き草を（えいびょう）といふ] なるをもつてのゆゑに、草をもつてこれに目くるのみ。余もし參訳せばまさに別に途あるべし。「生勝樂」とは、迦旃隣陀に触るれば染着の樂を生ず。かの軟宝に触るれば法喜の樂を生ず。二事あひはるかなり。勝にあらずはいかん。このゆゑに「宝性功德草 柔軟左右旋 触者生勝樂 過迦旃隣陀」といへり。

<意識>

・莊嚴触功德成就・この安樂淨土の様々な宝の性質は柔軟であり、決して剛直なものではない。ちょうど草が柔軟であるようにお浄土を莊嚴する宝は、風が草によって左右に揺れるように柔軟である。

そして、その宝に触れるものは優れた楽しみを得ることができる。「勝樂」とは単なる喜びではなく、法を聞き、法に触れた真理の喜びを生ずる。その勝樂を生ずる喜びは伽旃隣陀より優れている。（この伽旃隣陀が何であるかは、論註師は誤解をしている。）

・仏本なんがゆゑぞこの莊嚴を起したまへる。ある国土を見そなはずに、金・玉を宝重すといへども衣服となすことを得ず。・仏はなぜこのような莊嚴を起こされたのか。「金玉を重くす」とは非常な貴重な宝である。しかし、これを着るわけにはいかない。

・明鏡を珍翫すれども敷具によろしきことなし。これによりて目を悦ばしむれども、身に便りならず。・素晴らしき明らかな鏡を立派だともてあそんでも、これを敷物にすることはできない。

・これによりて目を悦ばしむれども、身に便りならず。身・眼の二情あに鋒楯せざらんや。・目を楽しませてくれるけれども身を悦ばしてくれるわけにはいかない。目の楽しみと身体のためのしみと矛盾している。一方は楽しいが一方は楽しくない。だから矛盾している。これがこの世の状況である。

・このゆゑに願じてのたまはく、「わが国土の人天の六情、水乳に和して、つひに楚越の勞を去らしめん」と。・「六情」（りくじょう）とは六根・六識。「水乳に合して」とは水と乳とは良く溶け合うもの。眼根を喜ばせるものが耳根を喜ばせるもの、舌も身もよろこばせ

るもの、そういうもの、そういう状況をあらしめていこう、と。

・このゆゑに願じてのたまはく、「わが国土の人天の六情、水乳に和して、つひに楚越の勞を去らしめん」と・・・「楚越」とは春秋戦国時代常に敵対した関係にあった国。楚に都合がよければ越には都合が悪いというような敵対関係のわずらわしさ、それを去るような国土を造り上げよう、と。

・ゆゑに七宝柔軟にして目を悦ばしめ身に便りなるなり。・・・この故に七宝は柔軟であり、目をよろこばすと同時に身も悦ばしめる宝をもって莊嚴していこうと願われた。

・「迦旃隣陀」とは、天竺（印度）の柔軟草の名なり。これに触るればよく樂受を生ず。ゆゑにもつて喩へとなす。・・・「迦旃隣陀」は草の名前だといっているが、これは水鳥の名前。「カーチェリンカ」は羽毛の豊富な水鳥。これは誤解されている。

・とても柔らかい羽毛だから、これで織った衣服は身に着けると気持ちの良いものである。

・ゆゑにもつて喩へとなす。註者（曇鸞）のいはく、この間の土・石・草・木はおのおの定体あり。訳者（菩提流支）なによりてか、かの宝を目けて草となすや。・・・我々の世界では土・石・草・木といえ、それぞれ定まった体を持っている。浄土の宝をなぜ草と翻訳したのか、どうも意味をなさない。

・まさにその（ひょう然）；[草風を得る貌なり] 然；[草の旋る貌なり]（えいびょう）；[細き草を（えいびょう）といふ] なるをもつてのゆゑに、草をもつてこれに目くるのみ。

・（ひょう然） 「草風を得る貌なり」。（えいびょう） 「細い草」。このように細い草が風になびくことをもって、草に例えたのだ。

・余もし参訳せばまさに別に途あるべし。・・・もし私が訳に参加したならば別の訳をしただろう。

・「生勝樂」とは、迦旃隣陀に触るれば染着の樂を生ず。かの軟宝に触るれば法喜の樂を生ず。二事あひはるかなり。勝にあらずはいかん。・・・生勝樂は迦旃隣陀に触れたら煩惱の樂を生じずるが、安樂浄土の柔らかな宝に触れたら法喜が生まれる。これは大きな違いである。だから「勝」と言わねばならないのだ。迦旃隣陀の樂は劣樂である、と。

・このゆゑに「宝性功德草 柔軟左右旋 触者生勝樂 過迦旃隣陀」といへり。

#### <感想>

・「安養浄土の莊嚴は 唯仏与仏の知見なり 究竟すること虚空にして 広大にして辺際なし」、とあり無分別智の領域であり、相對分別（虚妄分別）しかない私には本来的に知り様がない領域でした。この度「色功德成就」と「觸功德成就」の論主の言葉を曇鸞大師の解釈を通して学んで、浄土は一切の存在を、そのまま価値あらしめ、輝かしめる世界なることを教えられた。また、浄土は風の如くに、その徳に触れるものに生勝樂を与えてくださるとあり、今既に「法喜」を生ずるものとしてお育ての中にあることを、しみじみと思ふ事でした。（完）

「三種功德」 「雨功德」 豊平班 栗栖哲義担当箇所 2024.5.22

【水功德】

(原文書き下し) —— [wikia rc \(http://labo.wikidharma.org/index.php/\)](http://labo.wikidharma.org/index.php/) よし

宝華千万種 弥覆池流泉 微風動華葉 交錯光乱転

この四句は莊嚴水功德成就と名づく。

仏本なんがゆゑぞこの願を起したまへる。ある国土を見そなはずに、あるいは漚溺「江の水の大  
きなる波、これを漚溺といふ」洪濤「海の波の上がる」して滓沫人を驚かす。あるいは凝澌「氷  
を流す」「凍りてあひ着く」して、蹙「迫る」架し、「常を失す」を懐く。向に安悦の情なし。  
背ろに恐値の慮りあり。菩薩これを見そなはして大悲心を興したまへり。「願はくはわれ成仏  
せんに、あらゆる流・泉・池・沼「池なり」宮殿とあひ称ひ「事、『経』(大経・上)中に出  
づ。」「種々の宝華布きて水の飾りとなり、微風やうやく扇ぎて映発するに序あり、神を開き体を  
悦ばしめて、一として可ならずといふことなからん」と。このゆゑに「宝華千万種 弥覆池流泉  
微風動華葉 交錯光乱転」といへり。

(現代語訳——真宗大谷派蓮照寺のHP (<https://renshouji.com/ronchu-jou/#m9-1>) より

水・地・虚空(三種功德)

①水(水功德)

宝華千万種(ほうけせんまんじゆ)にして、池・流る・泉(せん)に弥覆(みふ)せり。微風  
(みふう)、華葉(けよう)を動かすに、交錯(きょうしゃく)して光乱転(ひかりらんで  
ん)す。

この四句は莊嚴水(すい) 功德成就と名づける。

仏はもと、どうしてこの願いをおこされたかといえば、ある国土を見られるに、川や海の水  
が大波をたて、にこり泡だつて人々を驚かせたり、流水が迫り来つて人々をとしこめおびやか  
したりする。このような事態に向うと、安らかな悦びの心もなくなり、あとからふりかえつてみ  
ると、恐怖の思いをいだくのである。

菩薩はこれを見られて大悲の心を興され、私が仏と成るにはあらゆる水の流れや池や沼は宮  
殿にふさわしくとのい、「このことは経(大経)の中に出ている」種々の宝花がしきつめら

れて水面を飾り、そよ風がその上をやわらかく吹き、光がきらきら輝きあうこと秩序正しく、見るものの心をはればれとさせ、身体をよろこばせて、何一つ意にそわないことの無いようしよう、と願われたのである。

だから「宝華千万種（ほうけせんまんじゆ）にして、池・流る・泉（せん）に弥覆（みふ）せり。微風（みふう）、華葉（けよう）を動かすに、交錯（きょうしゃく）して光乱転（ひかりらんでん）す」と言われるのである。

### 【地功德】

宮殿諸楼閣 観十方無礙 雑樹異光色 宝欄遍圍繞

この四句は莊嚴地功德成就と名づく。

仏本なんがゆゑそこの莊嚴を起したまへる。ある国土を見そなはずに、嶮嶮「高き貌なり」峻「高なり」嶺にして枯木岑に横たはり、岩客「岩客は山齊しからず」・「深き山谷または山消の貌なり」嶺「深くして崖りなし」にして脊「悪き草の貌なり」茅「道に草多くして行くべからず」壑に盈てり。茫々たる滄海、絶目の川たり。嵐々たる広沢、無蹤の所たり。菩薩これを見そなはして大悲の願を興したまへり。「願はくはわが国土は地平らかにして掌のごとく、宮殿・楼閣は鏡のごとくして、十方を納めんにあきらかにして属するところなく、また属せざるにあらざらん。宝樹・宝欄たがひに映飾とならん」と。このゆゑに「宮殿諸楼閣 観十方無礙 雑樹異光色 宝欄遍圍繞」といへり。

### ②地（地功德）

宮殿（くでん）・もろもろの楼閣（ろうかく）にして、十方（じつぼう）を観みること無碍（むげ）なり。

雑樹（ぞうじゆ）に異の光色あり、宝蘭遍（ほうらんあまね）く圍繞（いによう）せり。

この四句は莊嚴地（じ）功德成就と名づける。

仏はもと、どうしてこの莊嚴を起したもうたかというど、ある国土を見られるに、けわしくそびえたつ山々があり、その嶺には枯木が横たわり、形のととのわない山々が底無し谷をいだいて連なり、雑草が谷一杯におい繁っている。はてしない大海原は見わたす限りつづき、雑草がむなしく風になびく広い沢は、誰一人足をふみいれたことがない。

菩薩はこれを見られて大悲の願をおこされ、我が国土は土地が平らなこと掌（たなごころ）のように、宮殿の楼閣にあつてみれば鏡のように十方がおさまつて、まさに属（つ）くところなく、また属かないというのでもなく、宝の樹々とそれらをとりまく宝の蘭とは、互いにてらしあうように、と願われたのである。

だから「宮殿（くでん）・もろもろの楼閣（ろうかく）にして、十方（じつぼう）を觀（み）ること無碍（むげ）なり。雜樹（ぞうじゆ）に異の光色あり、宝蘭遍（ほうらんあまね）く圍繞（いによう）（せり）と言われるのである。

【虚空功德】

無量宝交絡 羅網遍虚空 種種鈴発響 宣吐妙法音

この四句は莊嚴虚空功德成就と名づく。

仏本なんがゆゑぞこの莊嚴を起したまへる。ある国土を見そなはずに、煙・雲・塵・霧、太虚を蔽障し、震烈・「雨の声なり」・「大雨なり」上よりして墮つ。不祥の裁「天の火なり」霓「屈れる虹、青赤あるいは白色の陰気なり」つねに空より来りて、憂慮百端にしてこれがために毛豎つ。菩薩これを見そなはずして大悲心を興したまへり。「願はくはわが国土には宝網交絡して、羅は虚空に遍し、鈴鐸「大鈴なり」宮商鳴りて道法を宣べん。これを視て厭ふことなく、道を懷ひて徳を見さん」と。このゆゑに「無量宝交絡 羅網遍虚空 種種鈴発響 宣吐妙法音」といへり。

③虚空（虚空功德）

無量の宝交絡（きょうらく）して、羅網虚空（らもうこくう）に遍（へん）ぜん。

種種の鈴（すず）、響（ひびき）を発して、妙法（みょうほう）の音を宣（の）べ吐（は）かん。

この四句は莊嚴虚空（こくう）功德成就と名づける。

仏はもと、どうしてこの莊嚴を起されたかという、ある国土を見られるに、煤煙やちりが大空をおおいかくし、雷が稲光とともに大雨をふらせ、不吉な天火や虹がことごとく空からやってきて心配がかさなり、ために身の毛もよだつ思いがするのである。

菩薩はこれを見られて大悲の心を興され、我が国土には宝でおりなした羅網（あみ）が大空一杯にひろがり、その羅網につけられた大きな鈴が五音の旋律をかなでて、仏道の法音を説き、これを見てあきることなく、仏道のことを懷（おも）い、その徳が身にそなわるように、と願われたのである。

だから「無量の宝交絡（きょうらく）して、羅網虚空（らもうこくう）に遍（へん）ぜん。種種の鈴（すず）、響（ひびき）を発して、妙法（みょうほう）の音を宣（の）べ吐（は）かん」と言われるのである。

【雨功德】

雨華衣莊嚴 無量香普熏

この二句は莊嚴雨功德成就と名づく。

仏本なんがゆるぞこの莊嚴を興したまへる。ある国土を見そなはずに、服飾をもつて地に布き、所尊を延請せんと欲す。あるいは香・華・名宝をもつて、用ゐて恭敬を表せんと欲す。しかも業貧しく感薄きものはこの事果さず。このゆるゑに大悲の願を興したまへり。「願はくはわが国土にはつねにこの物を雨らして衆生の意に満てん」と。なんがゆるぞ雨をもつて言をなすとならば、おそろくは取者のいはん。「もしつねに華と衣とを雨らさば、また虚空に填ち塞ぐべし。なによりてか妨げざらん」と。このゆるゑに雨をもつて喩へとなす。雨、時に適ひぬれば、すなはち洪滔「水漫ちて大し」の患ひなし。安樂の報、あに累情の物あらんや。経にのたまはく、「日夜六時に宝衣を雨り宝華を雨る。宝質柔軟にしてその上を履み踐むにすなはち下ること四寸、足を挙ぐる時に随ひて還復すること故のごとし。用ゐること訖りぬれば、宝地に入ること水の坎に入るのごとし」と。このゆるゑに「雨華衣莊嚴 無量香普熏」といへり。

花衣(けえ)を雨ふらす(雨(う)功德)

花衣(けえ)の莊嚴(しょうこん)を雨ふり、無量の香普(こうあまね)く薫(くん)ぜん。

この二句は莊嚴雨(う)功德成就と名づける。

仏はもと、どうしてこの莊嚴を起されたかというと、ある国土を見られるに、衣服を地に置いて尊敬する人をまねこうとしたり、香り高い花や名宝によって恭(うやま)いの心を表そうとしたりするが、善業がとぼしく果報がまずいので、このことを成しとげることができない。

だから大悲の願いを興され、我が国土には、つねにこれらの物(衣服や花や名宝)が雨ふつて、人々の意(こころ)を満足させよう、と願われたのである。

なぜ雨ということばで表現するかといえば、恐らく文にとらわれる者は云うであろう。もしつねに花や衣がふつてくるなら、大空はそれらのもので満ちふさがれてしまうはずなのに、どうしてさしつかえがないのか、と。だからこそ雨ということばによってたとえるのである。雨は時に適(かな)いさえすれば大水の心配はない。安樂国土の果報に、どうしてそのように心をわずらわすものがあるうか。

『經(大経と小経)にいわれている。「日夜六たび宝衣が雨ふり、宝花が雨ふる。その宝の質は柔軟で、その上を踏めば四寸ばかりさがり、足をあげるにしたがってまたもとにもどる。用がすめば、あたかも水が穴の中に流れ入るように、地中に入っていく。」と

だから「花衣(けえ)の莊嚴(しょうこん)を雨ふり、無量の香普(こうあまね)く薫(くん)ぜん」と言われるのである。



考察—ここから何を学び、何を考えるか？

(1) 浄土を説明し、理解させるために十七種の「器世間莊嚴」(国土莊嚴)を説き、続けて「衆生世間莊嚴」八種、「菩薩莊嚴」四種が説かれ、三嚴二十九種と言われる。そのそれぞれが「功德」として表現されている。

天親菩薩の『浄土論』が根本であるが、曇鸞大師はこの『浄土論註』という解説書を通して何を我々衆生に教えようとされたのか。

(2) 私の担当の「三種功德」は浄土の風景たる「水」「大地」「虚空」の功德を説き、続けてそこに降り注ぐ「雨」の功德を説かれる。清浄たるお浄土のこれらの自然の姿を借りて、何を伝えようとされたのか、それが大事である。

(3) 宮城顕先生のご指導に拠れば——『宮城顕選集』第十六巻参照——

① 「三種功德」(≡水、地、虚空)となったのは、

六大(宇宙及びその宇宙に存在するものを構成する要素)

≡虚空、識、地、水、火、風——私達の生活を成り立たせている身と環境)

から次の二つが除かれたからである。

- ・ 「識の一大は衆生世間に属するが故に」「有分別に属す故に」
- ・ 「浄土では物を炊いたり焼いたりする必要がないから火熱の働きはいらない」

・ 「風は見る可からざる故に、住処無きが故に」

② 安田理深先生は次のように言われている。(『願生浄土』112p)

「国土十七種は皆環境であるが、その中正しく環境の意義を明らかにしたのである。だから浄土全体に関係している。

浄土の原始的意義は環境にある。生活の環境である。もちろんこの生活はどういうものかという点、普通の自然的な生活の環境ではない。仏法の生活である。しかしそれを自然の生活を以て象徴する。」

③ 「水功德」は「浄土の莊嚴が願心の莊嚴である」ことを明らかにする。「阿弥陀仏として成就された、その願心を莊嚴しておられる。」「安樂浄土は願心の世界であって、単なるサトリの世界ではない。願心の歩みであり、願心の表現なのです。

金子大栄先生は「千万の華は、池の水際を覆い 微風、吹き渡れば、光は華と入り乱れ」と意識された。

水は時に人を呑み込み溺れさすほどの大波となり、氷に悩まされる様に日常性を破り、安らかな心が奪われ、恐怖に見舞われる。一方で水はものを養い育て、「開神悦体」「応法妙服」(三十八願)と言われるような徳があり、水をもって巧みに光に満ちた世界が表されている。そして浄土に生まれた人のその身にしみ透るまで、法の声をもって満たそうというものが、水

功德の一つの意味です。

③ 「地功德」を考える時

地の第一の働きは、その上に一切のものを載せ、荷負し持つ。地の第二の働きは、いのちを「出生」し、「養」う。大地は時に高く険しいものがあり、深い谷もある。青々として広くはてしない大海原もある。それに対して「歩み住むに艱難なく（掌石）、怖畏がない（仏掌）」ということが願われている。

楼閣はその大地に中心を生み出し、そこに統一を与える。そこに宮殿諸楼閣を建てしめることによって、そこに住む者をして、「観十方無碍」ならしめるということが、地功德の大きな意味として挙げられる。

地功德は「宮殿諸楼閣」において、その国土に精神的な統一があることが荘嚴されているのですが、その精神的な統一とは、一つの立場ですべてをきめつけていくことではなく、かえって、「耳目開明」「心得開明」という言葉のように、他の存在に耳を開き目をあけ、心をひらいてゆく世界なのです。

一つ一つの存在を尊ぶことのできる精神をもって統一されている世界であり、その中で自己の果たすべき使命が明確にされていく世界なのです。そのような世界の成就が、いまこの地功德荘嚴において、文字通り環境として願われ成就されているのです。

④ 「虚空功德」について考える

『大無量寿経』（島地1-37、東42）には「無量の宝網、仏土に弥覆せり。みな金縷・真珠・百千の雑宝、奇妙珍異なるをもつて荘嚴し交飾せり。」とある。

また『大無量寿経』（島地1-30、東34）には「清風時に発りて、五つの音声を出だす。微妙にして宮商自然に相和す。」

宝網の鈴鐸が鳴りひびいて道法を宣べる、のであり、人間の道としての仏法を明らかにされた。それを「道法を宣べる」「道教を光閃す」「普く道教を現す」「経法を演説し道教を宣布す」という。

ここにあって道教という言葉が用いられていますのは、「道法」がその世界に生きる人々の生活規範にまでなる、その生活の全体を根底から色づけるまでになるということを表そうとしている織田と思えるのです。そしてそこに、この虚空功德荘嚴の意味があるのだと思います。

○ 水功德が光に満ちた生命感を、地功德が精神生活の広がりを表すのに野に対していえば、この虚空功德はそこに住むものの生活感情に深く関わるものです。そういう生活感情そのものを変えていく、そういうものとして、国土の成就、依報荘嚴をおさえられてきている、こうみてよいかと思うのです。

⑤ 「雨功德」について

三種荘嚴が目で見るところの荘嚴であったのを受けて、今度は鼻でかぐところの香が、普く薫じているということを挙げる。

「花衣（けえ）の莊嚴を雨り（ふり）、無量の香普く薫ずせん」とあるが、雨というものは、いのちあるものを養い育てる。恵みの雨という言葉もあります。いのちを養育するというはたらきにおいて、法を雨という言葉で語られるわけです。

また、「服饒（ふくしき）を「地に布き」というのは、請うて「所尊」を自分の処に迎えるときの供養の法です。いわば、五体投地して「所尊」をお迎えしますという心を表すわけです。この雨功德莊嚴功德は第二十四願、「供具如意（供養如意）の願」によるものである。

大無量寿経（島地176、東55）には「心の所念に随いて、華香・伎楽・繪蓋（ぞうがい・仏殿を莊嚴する絹の天蓋）・幢幡・無数無量の供養の具、自然に化生して念に応じてすなわち至らん」とある。

更には三十二願「宝香合成の願」に通ずるものであり、大無量寿経（島地137、東54）には「もろもろの羅網およびもろもろの宝樹を吹くに、無量微妙の法音を演発し、万種温雅の徳香を流布す。それを聞（か）ぐことあれば、塵勞垢習、自然に起こらず、風その身に触るるに、みな快樂を得」とある。

他力の信心獲得の念仏者を染香人、香光莊嚴と呼ばれている。その染香人をもって、念仏者の徳が表現されているわけです。そのことを、念仏において、念ぜられるものの徳が念ずるものうえに成就していく相を例えるのだという様にも言い表す。この香は存在からにじみ出るということがあります。

また、「宝の質（すがた）柔軟にして其の上を履踐するに」云々は、常に新たに意の如くに供養できる世界、かぎりない修道生活を歩みしめる世界を成就しようと誓われている。「具足の世界」である。

安田理深い先生は「絶対生活に触れた場合、供養が成り立つ。供養することは喜捨である。一番大事なもの捨てるのは一番大事なものを見出した証拠である。供養恭敬ということは自己の全存在を喜んで捧げる。（『願生浄土』118p）

（4）この勉強会を通して、私の課題は「私の浄土理解」と「私を包む浄土の世界の感得」である。本願というも、お念仏というも、この「浄土」と切り離された別の世界の話ではない。「お浄土を説かず、お念仏申さない浄土真宗は観念論に墮す」とのことである。

では、私にとって「お浄土とはいかなる世界であるか」。言葉にして語れない「言妄慮絶」の覚りの世界かも知れないが、私なりに「うなづくこと可能な世界」「感得できる世界」であるに違いないと思う。それをこの『浄土論』『浄土論註』は「国土莊嚴」という形（譬え、具体例）を通して理解させようとされているのであらうと思うのである。